

虚構とは何か

—— 認知科学からの照射 ——

野 中 哲 照

一、はじめに

虚構とは何かを問うことは、物語とは何かを問うに等しいことである。虚構の発生・構造化の道筋が、そのまま物語の形成過程や構造を説明することを意味するからだ。

『源氏物語』は作り物語だが、田中隆昭『源氏物語 歴史と虚構』（勉誠社、一九九三）、藤本勝義『源氏物語の想像力——史実と虚構』（笠間書院、一九九四）、鈴木日出男『源氏物語虚構論』（東大出版会、二〇〇三）のような虚構論がある。その書名においては、史実と虚構とを対置しているようにみえるが、いずれも史実と物語の懸隔を問題にしてはいない。それらは、平安の文化的・社会的基盤に立脚して、テキスト形成の方法を分析したものといえる。つまり、現実世界とは別のところ（テキスト）にもう一つの世界を切り出したという意味での「虚構」の論である。

一方、軍記・歴史物語の研究者が用いている「虚構」は、歴史学から強い影響を受けているせいか、部分的・断片的な史実離れ

を指すことが多い。たとえば、歴史学の立場から物語を見たものとして、上横手雅敬『平家物語の虚構と真実』（瑞書房、一九八五）があり、川合康『源平合戦の虚像を剥ぐ』（講談社、一九九六）があり、坂井孝一『曾我物語の史実と虚構』（吉川弘文館、二〇〇〇）がある。これらに同調するように、『平家』をはじめ軍記・歴史物語の注釈書には、史実と物語との対照表（その場合の史実は公家日記などの記録類をさす）が載せられていることが少なくないし、頭注にも『玉葉』や『吾妻鏡』などと物語との相違点が指摘されることが多い。軍記・歴史物語は、史実そのままを物語の骨格として取り込んでいるため、研究者も歴史の実体に引きずられないように「虚の構造体」としてテキストを分析することが難しい。

ところで、近世文学の研究者のいう実録とは、『実録風の歴史小説』の意味である。すなわち、逆説的だが、ほとんど虚構と等しい意味で用いられている。実録の多くは、実在しない人物を登場させたり、ありもしない事件を捏造したりするなど、事実を大

きく歪曲するような虚構化がはかられている（高橋圭一「実録研究——筋を通す文学」清文堂出版、二〇〇二）。一方、中世には実録というジャンルはないが、研究者は実録的・実録性という用語を用いる。たとえば、『平家』に比べて『太平記』は実録的だとか、初期軍記や戦国軍記は実録性が強いなどと……。このような実録とは、明らかにドキュメンタリー的性格の意味で用いられている。実録をめぐる中世・近世の研究者の意識の相違は、虚構と物語に対する意識のずれを窺ううえで象徴的である。

軍記・歴史物語の研究者が史実を意識せざるをえないのは、現象的な史実離れがテキスト形成の方法を窺う鍵になっていると判断されるゆえのことである。このこと自体は、批判されるべきことではない。ただし、構造を蔑ろにして現象的な非史実記事に目を奪われることの陥穽は認識しておくべきだろう。物語はそもそもどのように形成され構造化されるか、という基本原理を押さえておかないと、視野の狭い隘路に迷い込む。

二、認知科学という虚構

人間の知覚や記憶の段階において、そもそも虚構はどのように発生し、展開するのか。そのような「虚」の「構造化」されてゆく過程を確認しておく必要がある。そのことが、虚構の物語の形成過程とパラレルな問題を含むからである。

人間の知覚の段階から、ある種の虚構が始まっているということとは、よく指摘されている。有名な「矢印の長さに関する錯視」など、錯視図形についての実験は多い。また、認知心理学で行わ

れている実験で、被験者を二グループに分け、事前にある情報を与えたグループとそうでないグループとで、対象に関する印象・感情が異なってくるという報告が多いのも、われわれが虚心にものを見るなどということがそもそもできない存在であることを示唆している。現実を認知することと虚構とは不可分でないのだ。

知覚・認知した情報は、脳に記憶される。そして、記憶自体も虚構化を避けられない仕組みになっている。というのは、記憶は、新しい経験が日々付加され、過去の記憶全体が再構成され続ける、動態的なものだからである。そこで、宿命的に史実離れが生じる。

次のような研究がある。被験者にある映画を観てもらい、一週間後にどれだけ記憶が正確かを確認する実験である。交通事故のシーンがあり、Aグループの被験者には「車が止った時」、Bグループの被験者には「車が急停止した時」、ガラスは割れたか、とそれぞれ尋ねた。じつは、映画にはガラスの割れるシーンなどなかったのだが、AグループよりもBグループのほうがガラスが割れたと答えた被験者が三倍に上った（岩波講座認知科学5「記憶と学習」岩波書店、一九九四。Seashという強い表現によって、記憶が捻じ曲げられる可能性を示したのである。新しい経験（聞き手からの問いかけ）が、記憶内容を変えてしまうのだ。

記憶は、脳のなかに固定的に焼きつけられたものではなく、現在の自分によって意味づけられたものとして、塗り替えられて再生される。つまり、記憶の構造全体が現在の生活からバイアスを受け、変容し続けているのである（二本宏明「脳と記憶——その心理

学と生理学」共立出版、一九八九の紹介するスピロの実験もこれを裏付ける。その意味では、この世に時の流れが存在し、人が新しい経験を積み重ねてゆくかぎり、虚構もなくなることはない。

このように、知覚・認知や記憶の段階にまで掘り下げれば、事実からの乖離という意味での虚構は、きわめて広汎にわたる。そのため、事実と虚構の差など問題ではないとか、そもそもそのような差などないという論調にしばしば出会うことになる。それらにも、もちろん首肯すべき点はあるし、ある種の正論ではあろうが、われわれが日常的に実感している文学の虚構の感覚とはかけ離れている。学習院本『平治』の義経伝承と御伽草子『御曹子島渡り』も同じ虚構、『平家』の「敦盛最期」と浄瑠璃『一谷嫩軍記』も同じ虚構では済まない。ことさら史料と比較しなくても、史実離れを、そして史実離れの程度の差を、われわれは実感している。そこで、認知科学で指摘されているような視点が、物語の虚構のメカニズムの解明に援用しうろのか、文学研究の立場から一度は捉え直してみる必要があろう。

三、虚構のメカニズム

前節のように虚構は流動的なものとして捉えられるわけだが、物語（歴史文学）の形成に即して言えば、時間の推移とともに、（１）次々に新しい視点が加わり、（２）事件についての因果関係が多様に推究され、（３）同時代の中で事件や人物の意味づけが改められるなど、無意識の読み替えが物語の形成に直接反映してゆく。作り物語の場合でも、素材や断片的な着想と全体構想と

の往復運動の中で、つまりは作者自身による読み替えによって、形成されてゆく。以下、（１）そのような視点の重層化、（２）合理性の付与、（３）典型化という側面から、流動的な「虚の構造体」としての物語のありようを窺う。

（１）虚構とは視点の重層化である

多くの軍記において、合戦の原因から終結までの経緯ばかりでなく、さらにそれを包み込むように合戦前後における社会状況の変化（乱世から平和な新時代へ、あるいは聖代が崩壊して無秩序な時代に突入したなど）を記す。それは視点の重層化のもたらしたものである。

ティム・オブライエンの小説『僕が戦場で死んだら』（白水社、一九九〇の中野圭二訳による）は、彼がベトナム戦争でアメリカ軍の一兵卒として戦ったドキュメンタリーである。実名の本人が登場し、現地でリアルタイムに記録していた日記がそのまま活字になったような小説である。これにも虚構がまったくないとは言えないが、われわれの知る戦争文学と違う生々しさがそこにはある。その顕著な差異は、俯瞰的な視点の欠如である。夜中の敵との銃撃戦において、どちらが優勢なのか、結果として勝ったのか負けたのかさえわからない。行軍のさなか、自分たちの現在地がわからず、襲撃した村の名前さえ知らない。それが、戦争を内側から描いた場合の実態だろう（この小説は、梶原正昭が死去の六か月前、伊豆で行った最後の大学院合宿の教材にしたもの。利根川清の教示による）。ところが、古典の軍記でも、近代の戦争文学でも、それ

らの内部には戦況の解説があったり、地理的な説明があったりするものが、一般的である。たとえそれが事実と反するものでないとしても、それらの俯瞰的・概括的な視点の所在自体が表現世界、すなわち「虚の構造体」の始動を意味する。それらの説明的な表現が、時間的に後から付与されたことは疑いようがないのだ。

また、たとえ俯瞰的な視点をもつていても、それが単眼的であれば、テクストの世界は広がらない。『純友追討記』が官からの一方的な賊軍追討の記録と評されることが多いように、視点が単一であれば、テクストは平板になる。逆に、視点が輻輳してくれば、テクストの世界は厚みを増し、多面性を有するようになり、現実味（現実の世界とは別なところに切り出された、もう一つの現実という意味での）を帯びてくる。テクストの世界を立体的に立ち上げてゆくには、視点の重層化は不可欠である。『源氏』や『平家』に目慣れていると、そのようなことは自明かつ平易なことと考へがちだが、乱直後の成立といわれる歴史文学のテクストに、それを望むことはできないのである。逐目的に書かれた公家日記と晩年に集大成された日記文学との差は、その表現以前の、視点の重層性の問題だろう。

虚構にとって重要なのは、俯瞰的な視点だけではない。登場人物Aの視点に加えて、登場人物Bの視点が加われば、ひとつの視点が絶対化されることはなくなる。視点は登場人物のAに同化したり、Bに偏ったり、あるいは先まで見据えた全知的な視点から物語を進行させたり、テクスト内部を自在に移動する。『平家』『木曾最期』では、義仲に視点同化して兼平を案じ、兼平に同化

して義仲を想う。その往復運動の中で、互いを思い合う心情の強さが表現される。どちらか一方の、あるいは俯瞰的な視点では、一体感も、心情の微妙なずれも、表現しえない。時間の経過とともに、物語の中のさまざまな登場人物に感情移入することが可能となり、同時に視点が自在に移動して、テクストの表現世界は厚みを帯びてくる。『源氏』の草子地が、各人物の言動を相対化する機能をもっていることは、よく知られている。

物語の形成に伝承が重要な役割を果たすのは、それらの情報とともに、さまざまな立場から同一事件を捉えなおす視点も含みこまれていくからである。視点・位相の違う伝承を包み込むことによって物語に亀裂が生じる危険性と、物語に豊かさがもたらされる利点とは、裏腹の関係にあるのだ。

(2) 虚構とは合理性の付与である

無理にこじつけてでも、合理性を成立させようとする指向がわれわれに備わっているという脳神経生理学の実験がある。病氣治療のために右脳と左脳を繋ぐ脳梁をやむなく切断することがある。その後、右眼にニワトリの足を、左眼に雪景色をそれぞれ患者に見せる。次に、テーブルの上に数枚の絵を置き、先に見た絵と関連のあるものを選ばせる。右手でニワトリ、左手でスコップ（雪かきの連想）を指さした患者に、なぜそれらを選んだのかを尋ねると、「簡単なことでしょう。ニワトリの足は当然ニワトリと関連があるし、ニワトリ小屋を掃除するためにはスコップが必要だから」（傍線野中、「雪かきをするためには」でなく）と答えたとい

う（ガザニガ著、杉下守弘・関啓子訳「社会的脳——心のネットワークの発見」青土社、一九八七）。言語能力は左脳が制御しているから、左眼から入って右脳に達した雪景色の情報は言語化されず、ニワトリの足、ニワトリ、スコップを繋げて、合理性を捏造したのである。われわれの左脳の言語野には、たとえこじつけであれ、合理的な脈絡をつけて説明したいという欲求がプログラミングされているのだ（小坂井敏晶「民族という虚構」東大出版会、二〇〇二）。言語とは——ギリシャ哲学でロゴスが「言語」も「理法」を意味するように——そもそも合理性・つじつまと不分離なものである。以下、この観点から因果律の付与、歴史の実体との合理化、物語内部の合理化の三種の合理化について述べる。

① 因果律の付与

テキストの内部に、ことの発端から結末までの因果関係を付与されていない物語は存在しない。もし、あるとすれば、それは大津雄一のいうように、物語ではなく年表である（『太平記』あるいは『歴史』の責務について）『国文学研究』二二集、一九九七、一〇。

そして、因果関係は、「先に結果ありき」で、後から原因が定められて、物語に投げ込まれる。結果をもとにしてその原因を探ろうとする思考回路は、より賢明に生きようとする生物的本能のもたらすものである。たとえば、われわれは、転んだという結果に驚いて、なぜ転んだのか、その原因を突き止めるために、無意識のうちに後ろを振り返り、石を確認する。石につまずいて（原因）、転んだのだ（結果）と了解し、次からは石につまずくまい、と有効な経験（教訓）として自らの内部に蓄積しておこうとする

のである。歴史でも日常生活でも、因果関係のフィルターをかけて物事をみつめるという性癖を、われわれは宿命的に背負っている。

そして、時の流れに従って視点が重層化するのに沿って、結果に対する原因の推究も重層化する。原因と結果は一对一の対応とは限らず、多様な解釈が同時に並存しうるのだ。原因について、いくつもの可能性を考えてみようとすることも、よりよく生きるための生物的本能によるものである。フロイトの言葉で言えば「原因重複の原理」にあたる（『フロイト著作集4』人文書院、一九七〇）。『平家』で例を挙げると、俊寛僧都ひとりが鬼界が島に残されることになったという結果に対して、平清盛の怒りがあったという原因が、ひとつの解釈として付与される。怒りをかうことになった直接要因は、清盛の恩顧を受けた身でありながら裏切ったことと、打倒平家の謀議の場所が俊寛の山荘であったことが挙げられる。さらに、赦免された成経と康頼は鬼界が島に熊野三山を勧請して日々帰洛を祈っていたが、俊寛はこれに同調しなかった、とある。つまり、俊寛の不信心が、彼の残留の原因であるという仏法的な因果応報の解釈も重ねられている。俊寛残留の原因は、三重にも捉え直されたのだ。

このとき、結果に対応すべきものとして、つじつまの点からみて不都合な原因は書き換えられる。鹿の谷事件の謀議の場は浄意（浄賢）の山荘だった可能性が高い（『愚管抄』）のだが、『平家』では、俊寛の悲劇という結末に見合うためには、俊寛の山荘でなくてはならなかった。このように、原因と結果の関係が恣意的に

操作されるから物語は整合的な構造体を保ちうるのだし、因果関係が複線のだから物語が重層的な厚み（儒教的な、仏教的な、処世訓的なさまざまな学習の機会）を帯びてくる。

② 物語内部の合理化

物語は、原則的には内部矛盾をきたさないように計算されてつくられる。構造とは、そういうものだからである。人物像にはなほだしい亀裂が生じたり、人物の年齢に齟齬をきたしたりすれば、物語として成り立たなくなる。「源氏」で「年立」を作りうるのは、作者もそれをイメージ化して年齢や時間推移の矛盾を露呈することのないよう気を留めていたからである。森鷗外は、「歴史其儘と歴史離れ」（「心の花」一九一五・一）「現代日本文学大系8」筑摩書房、一九七二）で、「山椒大夫」の安寿・厨子王の年齢設定に計算をめぐらし、腐心したことを明かしている。

③ 歴史の実体との調整

物語は、すべてを史実や先行伝承から引き離す目的で成り立つものではない。結果的に史実から離れることを厭わないだけである。当然、大切にされる史実もある。「平家」では、清盛の死去、平家都落ち、平家滅亡などの主要な日付は守られる。それらの周辺は、大きく虚構化がなされても構わないわけである。軍記・歴史物語の場合、動かせない日付、事項、人物像を軸にしつつ、その周辺を自在に操作することによって、いかに中心部分の特性を引き出すか、重大性を訴えるか、という発想で、虚構化がなされる。そこが、作り物語である「源氏」との大きな違いである。しかし、「源氏」でも、歴史的なりアリティは必要とした。

「宇多帝の御誠」を出して「寛平御遺誠」を想起させ、「朱雀」「冷泉」のような実在の天皇の名とわざわざ交錯させる。前掲の森鷗外の文章でも、「和名抄」などで時代考証したり、実在の藤原師実を小説に引き込んでアリティを演出した裏話を語っている。虚構のエスカレートについては後述するが、果てしなく現実離れすることのないように、歴史の実体を意識することによって、物語はわれわれの世界に繋ぎとめられるのである（御伽草子など娯楽的なテクストを除く）。

（3）虚構とは典型化である

記憶は、ただ記憶の貯蔵庫に収めておくだけでは意味がない。取り出すことが重要なのだ。めまぐるしく変化する状況に瞬時に対応するには、記憶の貯蔵庫から類似の状況を取り出すことによって判断が可能となる。ゆえに、記憶はあらかじめ分類整理されている必要がある。それが、範疇化であり、典型化である。それらしい特徴をつかんで、その特徴のもとにグループ分けする。たとえば、一年に何百回と通る通学路をそのまま何百とおりの経験として入力すると、脳は機能しなくなるので、類似の経験を概括する力を備えている。それができてこそ、この角からは自転車飛び出しやすいなどと蓄積した経験を有効に引き出すことができる。この、範疇化こそが、虚構のそもその始まりであり、文学においては、人物像の典型・話型のパターン・表現の類型（対を含む）・比喩・本歌取りなどの問題に直結する。古典に、人間や社会の普遍的な姿を学びうるとするのは、当然といえば当然な

のだ。以下、典型化から派生する五種の虚構の様相(①)~(⑤)と、二種の発展の方向性(⑥)(⑦)について述べる。

① 人物像の典型化

物語の世界では、人物像の典型化の問題が、まずある。悪人らしく、悲劇の妻らしく、嫡男らしく、それぞれに、である。日下力の分析によれば、『平家』では、賢人である嫡男重盛と愚人である次男宗盛との対比、物事を裏まで見通す炯眼の知盛とそれをもたない宗盛など、兄弟の人物像は相互の対峙関係を図りつつ形成されているという(『平家物語』四兄弟の論——宗盛と知盛、そして重衡を中心に——『軍記文学の系譜と展開』汲古書院、一九九八)。それぞれに、役割を負わせられたのである。

人物の行動にも、類型がある。『保元』の為義北の方、『平家』の小宰相など、貞女は入水の行為によって、それが証明される。

② 主題・主役の典型化

典型化のためには、不要な夾雑物を排除する。延慶本『平家』では、俊寛ら三人は初めは別々の島に流されていたとか、有王は三人兄弟の末っ子であったとか、雑駁な情報が盛り込まれている。これに対して、覚一本ではそれらを消してゆく。話の典型化のためには(俊寛の悲劇というテーマを際立たせるためには)、不要な、という以上に有害な情報だったのである。また、延慶本では成経・康頼・俊寛を等価に描く部分もあるが、覚一本で俊寛を主役にして、他の二人を脇役に押しやるという操作をしたのも、話の特徴(いわゆる主題)をつかみやすくするための典型化ということができる。もつとも悲劇的な人物をひとり主役に立てれば、そ

の素材話の大枠を壊さないまま、主題も明瞭になる。

③ 時代の典型化

典型は、時の順序の差し替えにも関与し、それらしい時代づくりをする。一時代に対する印象も、典型化される。よい印象の時代は徹底的に美化される。『保元』での鳥羽院治世は聖代として位置づけられ、『平家』での平家全盛期は恐怖政治の時代としてかたどられている。その典型化のために、記述の順序の差し替えが行われる。『建礼門院右京大夫集』の第三部は、資盛との別離から彼の一周忌までのことを主題にしている。そのため、四月の初音の歌や、五月の母の忌日の歌を先に組み、それらの次に三月の資盛一周忌の歌で第三部を閉じる。不自然な組み替えだが、それが彼女の持っている印象にふさわしい、表現世界での時代づくりなのだ。日記文学には、類似の方法がしばしば見受けられる。

伊予国の河野通信が平家に反旗を翻したのは、『吾妻鏡』によれば清盛没後の治承五年(一一八二)閏二月十二日なのに、『平家』では清盛没の閏二月四日より前の、二月十六日にその知らせが届いたとしている。東国では頼朝が、北国では義仲が、九州では緒方らが、四国でも河野一族が、それぞれ反平家の烽火を上げたという騒然とした時代状況をつくって、その中で清盛の「あつち死に」を演出している。そのためには、物語世界において、河野一族の離反は、清盛の生前でなくてはならない。その時代づくりのために、順序が差し替えられたのである。

そして、アーサー・C・ダントのいうように、ほとんどすべての場合、物語の結末が先に決定されている(河本英夫訳『物語とし

ての歴史 歴史の分析哲学」国文社、一九八九。その結末に対応するにふさわしい冒頭のありようが、後から決定される。平家滅亡という結果を見て、物語の冒頭は平家の隆盛から語られることになる。つまり、物語は、後ろが前を定めることによって、段差（落差）をきわだたせ、ドラマティックに構えられる。これも、時代づくりである。

④ 空間の典型化

『今昔物語集』など説話世界には、鄙（田舎）がよく出る。非文化的な土地としてである。田舎者は身分が低いだけでなく、教養もなく、信仰心もない、とされる。逆にそのベースがあるから、「鄙には稀な女」が輝く。その延長線上で、『今昔』巻三十一の胡国、「保元」の鬼が島、「平家」の鬼界が島などの辺境には未開ないしは野蛮な異人が住むとされる。都の近くでも、白河・鳥辺野・鳥羽など、それぞれに固定したイメージ（土地柄の印象）をもっている。それらは、物語以前の人々の認識の段階からである。初対面の人の出身地を聞いて、既習の県民性のフィルターをかけて相手を眺めた経験は誰にもあるだろう。まして、物語内部の空間が、そのような典型から遁れようはずがない。『平家』でも、斎藤別当実盛が、勇猛な東国武士（源氏方）と軟弱な平家方とが対照的だと語るのは、当時の誰もが抱いていた共通認識を代弁したものでしかない（実体がそうであったか否かに関わらず）。おそらく、滅びた者たちに向ける哀感に満ちた眼ざしが彼らに貴種性や軟弱さのイメージを付与したのだろうし、逆に、勝者を賞賛し、その力を怖れる心情が、彼らに無頼性や勇猛な像を与えたの

だろう。

道行も、これと関係がある。都市と都市、あるいは都市と鄙とを結ぶ街道には、叙情的なイメージが染み付いている。歌枕の地がそこにあれば、なおさらである。それは、旅と住み慣れた土地を離れるという感傷とが深く結びついて典型化されているからだ。

⑤ 因果律の典型化

前節で述べた因果律も、当然、典型化される。ありえそうな因果律の典型（パターン）が物語世界で反復されることになる。一族の滅亡という結果があれば、因果応報（自業自得）という典型からして、さぞかしその一族は横暴であったのだろうとか、仏教的なフィルターを当てれば、さぞかし不信心だったのだろうとか、おきまりのパターンがあつて、遡及するかたちで初期のイメージが形成される。そうして、もつともわれわれにとつて納得しやすい私たちの因果関係が虚構される。もともと、われわれは、教育されることを無意識のうちに望んでいるのである。これも、生物的本能（よりよく生きるためにパターンを学習したい本能）のもたらすところである。

治承四年（一一八〇）四月二十九日に京都周辺を荒らした辻風（玉葉）「山槐記」などは、覚一本「平家」ではその前年の五月二日に移されている。重盛の死去（八月一日、「玉葉」では七月二十九日）や後白河院幽閉事件（十一月二十日）の予兆的な位置に、である。予兆とは冥の意思、すなわち物語内部では、起こるべき結果に対する原因の一端を担う。物語内に、因果関係を投入したの

である。また、頼朝が征夷大將軍に任命されたのを、建久三年（一一九二）から寿永二年（一一八三）へと九年も遡らせたのは、木曾義仲と源頼朝との源氏内紛の段階で、頼朝を（公へ）、義仲（ひいてはその後の平家も）を（賊へ）とする流れを、物語の中に作ってゆく必要からである。官職を得たからこそ、頼朝が義仲や平家を追討するという構図をうちだすことができる。

⑥ エスカレートする典型

典型はエスカレートする。輪郭を明瞭にして、わかりやすくしたいという指向がとどまらないからである。それらしい特徴、典型的な要素をどんどん伸ばしてゆけば、デフォルメ（誇張）ということになる。源為朝の弓勢は、『平家物語』巻九「弓流し」の三人張りを起点として、古活字本「保元」では五人張り、『義経記』では七人張りになる。一般論として、軍勢の数は、初期本では少ないのに、『源平盛衰記』など後出の異本では数倍にも膨れ上がる人が多い。激烈な戦闘のほうに、戦闘らしいからである。逆に、小さ子の伝承は、『小男の草子』の一尺の小男→一寸法師→五分次郎のように、小さくなるほうへエスカレートする。

⑦ 量産される典型

さらに、典型は類似パターンや反転パターンを多く生む。類似パターンについては、これまで十分に述べた。ここでは、対照や反転について触れておく。『保元』では、後白河帝方のいくさ評定と崇徳院方のそれとが対照的に構成され、それが合戦の勝敗を分けたという枠組みをもっている。対照の構図自体が、わかりやすい典型の一種である。人物像でも、最期に往生を遂げる重衡

と、最期まで妄念を捨てきれない宗盛の対があり、敵の呼びかけに即座に反応する若武者敦盛と、自分は味方だと言って欺こうとする巧者忠度の対のような反転の焼き増しがみられる。御伽草子では、パターン（話型）をずらして再生産するのが常套的な方法である。義経が千人斬りをしたり、弁慶が千人斬りをしたり、千本太刀奪いしたり、というヴァリアントを生んでゆく。対照化・反転化も、われわれが理解しやすい記憶の方法だといってよい。

その再生産に、われわれが面白みを感じるのには、既知のパターンとのずれの部分に新しさを感じるからである。そもそも何のために情報は典型化されるのかを思い返してみると、典型という基本形をもとに、応用するためである。蓄積した経験（典型）をもとに、目の前の新しい状況を乗り越えてゆく能力（たとえば、いくつかの狩場の類型をつかんで、初めての山でもよい狩場を見つけられる）が、生物的生存を安定させるのだ。応用のために基本（典型）が役立ったとき、われわれはこの上ない喜びを感じるように仕組まれている。つまり、典型を少しずらして役立たせると快感を感じるようにインプットされているのである（説明よりも例題のほうが学習効果の高いことが『岩波講座認知科学Ⅰ 認知科学の基礎』岩波書店、一九九五に報告されている）。TVの時代劇「水戸黄門」では、四十分もたつとそろそろ印籠が出てくる時間だということまで、われわれは知っている。マンネリズムといわれるが、前回とまったく同じ話の再放送ならば支持する視聴者はいない。基本形を遵守しながら、少しずらしてあるところがミソなのだ。視聴者は、既知の典型が役立つ瞬間を確認したいのである。人間と

は、比喩・本歌取りから駄洒落にいたるまで、基本形の知識を援用できる程度にずれているところが面白いと感じる生き物なのである。

五、おわりに

以上のように、虚構とは、視点の重層化であり、合理性の付与であり、典型化である。物語が、因果律・典型などの内部論理を整合的に構造化しようとするときに、史実が邪魔ものとなり、結果的に、一部は無視され、あるいは改変される。つまりは、物語が構造をもつということ自体が、虚構化の宿命を背負っているということだ。ある部分が史実と違う、のではない。構造全体が、もとのものからずれ、その結果として、部分的に書き換えられる記述が出てくる。それは、物語が意味をもつものとして存在し続けようとする結果である。

そのような「虚の構造体」の仕組みが、第二節で述べたような認識・記憶のメカニズムと相似形を成すものと気づくとき、文学研究にとっての認知科学的視点の必要性を痛感させられる。テキスト内のある表現が別の外部資料から影響を受けたものだとか、史実とは違うとかいうような指摘は、それ自体にも一定の意義をもつ。しかし加えて、それを現出させた「思考回路」という生命

力が吹き込まれると、個々の現象的な指摘はさらに重みを増して蘇る。

わたしは、すべての研究というものは——さまざまな基礎研究の裾野の必要性を感じ、性急に結論ばかりを求めるものではないが——究極的には、「人間とは何か」を追究し、「これからどう生きてゆくべきか」を考えることに繋がってゆくべきものであると考えている。「自分探し」であり、「自分のよりよい生き方探し」である。人間の過去の歩みを分析し、今後の進むべき道を探る。宇宙物理学で地球の誕生を、言語学で日本語の由来を、民族学で日本人のルーツを解き明かそうとすることは、人間の本性的な探究心にも、社会的な要求にも叶うものである。文学研究は、さてどうか。

小稿では、認知科学としての文学研究、認知文芸学とでも呼ぶべき方向性を試みた。われわれは、何のために文学を研究しているのか。文学研究によって、人間の、社会の、何が明らかになるのか。文学作品、テキストは、人間が生み出したひとつの現象である。経済学が、経済という社会現象を研究するのと本質的には変わらない。人間や社会の縮図であるはずの文学の研究において、われわれは、人間不在の研究を長年続けてきたのではなかったか。